

海外における三木清受容の推移

北野亮太郎 KITANO Ryotaro

はじめに

近年、欧米における哲学研究の分野において、西洋中心主義への反省という時流も手伝い、ヨーロッパ以外の地域の思想・哲学への注目が強まっている。そうした中、京都学派の哲学に対する海外での研究も盛んになっている。本稿では、その中でも三木清が海外、主に欧米においてどのように評価、分析されてきたかを概観する。

以下で詳述するように、海外における三木の読解は、その政治的な立場を主題とするものから、哲学的な議論に注目するものへと推移している。

まずは、三木が欧米においてどのような政治的立場の思想家として捉えられてきたかを整理する。20世紀末まで欧米において、京都学派の思想家についての議論は、当時の軍国主義日本に政治的後ろ盾を提供したとして、その政治的思想の検討が中心的テーマであった。通常、京都学派の一員と見なされる三木においても、そうした議論をまずは扱う必要があるだろう。

次に、三木の哲学的議論がどのように紹介されているかを検証する。三木の政治的立場を前提にせず、純粹に哲学的営為そのものが注目されるようになったのは、1990年代の末からである。こうした中で、三木の哲学のどのような点が特に注目されてきたかを明らかにする。

また、こうした紹介にとどまらず、三木の哲学を現代哲学の地平において捉え直そうとする議論も、特に2010年代に入り現われてきた。本稿では、積極的に三木の哲学を実践的、現代的問題において把握しようと試みている、ジョン・W・M・クランメル (J. W. M. Krummel) に注目し、その議論を検討する。こうした議論を概観、把

握することで、より多角的に三木の哲学を把握、検討する視座を得る一助としたい。

京都学派としての三木清

三木は、戦前から戦中にかけて日本の思想を牽引した京都学派の中に位置付けられるのが一般的である。そのため、海外、特に北米では、哲学的な思想の検討よりも政治的な主張や発言が優先的に議論されてきたようである。

アグスティン・ハシント・サバラ（A. Jacinto Zavala）やスーザン・C・タウンゼント（S. C. Townsend）によると、1990年代まで三木は、特にアメリカの左派思想家から「転向者」として批判されてきた。マルクス主義を熱心に研究した哲学者でありながら、日本ファシズムの政治に積極的に関わったとされるためである。

ハシント・サバラは、三木を「主義主張の追従者あるいはムーブメントの先導者というよりは、独立した批評家であった」としながらも、「一般的に高倉輝や戸坂潤と共に京都大学の左翼に位置づけられる」と紹介している¹。また、タウンゼントによれば、1970年代後半から80年代前半、三木を肯定的に捉える言説への批判が日本国外から起こった一方、三木の思想は欧米の歴史家によって、「1920年代後半のマルクス主義と、1930年代初めの協同主義の理論化」を把握するのに適しているものと評価されてもいた²。特に三木のマルクス研究は、「当時の資本主義社会の日本で最も説得力のある分析だった」と評価されていたとされる³。このように、両者の整理から、三木は欧米において、左翼的思想家として把握、評価されていたことが分かる。だからこそ、1937年に、三木が当時の総理大臣であった近衛文麿のブレーンとして昭和研究会に参加し、その後、東亜共同体論を唱えるなど政治の中枢とのかかわりを強く持ったことは、欧米の左翼的研究者から「転向」として厳しく批判されることになった。こうした軍国主義的政策に協力的に見える三木の態度が要因となり、三木の仕事、特にジャーナリストとしての、あるいはコメンテーターとしての活躍が欧米の研究者から顧みられなくなっていたとタウンゼントは指摘する⁴。

しかし、このような三木の評価に対し、日本だけでなく欧米の研究者からも反論がなされている。1997年にグラハム・パークス (G. Parkes) による「推定のファシズム (the putative fascism)」論文の中で「狭い研究あるいは政治的正義に基づいたバイアス」と批判されている⁵。さらに、パークスは、戦勝国側の論理で京都学派を「退けることは、英語圏における京都学派の思想家の研究の発達を妨げる陰湿な結果をもたらす」として、三木に限らず、京都学派に対する見方の是正を求めている⁶。確かに、三木を含む京都学派の思想は、日本のナショナリズムや、帝国主義的政策の思想的後ろ盾となったことは否定しえない。しかし、それらとファシズムの思想とは区別されるべきだとパークスは主張する⁷。また、クランメルも、三木の「転向」に対しては、日本のナショナリズムが高まり、日中戦争の始まりから戦時に突入していく「当時の日本の社会情勢を考慮する必要がある」と述べている⁸。日本の研究者からは、三木の戦時下での態度について、軍国主義下の日本で醸成された社会的ムードの中、日本の侵略戦争を阻止するために、戦略的にそのムードの枠内で発言することで、穏便な東アジアとの関係性を模索したものだったと指摘されている。こうした三木の戦時下での発言の方法を内田弘は「戦時レトリック」と呼び⁹、こうした三木の態度を鈴木正は「協力的抵抗」と呼ぶ¹⁰。他方で、三木の戦時批評に明確な戦争批判を読み取ろうとする吉田傑俊のような立場もある¹¹。そして三木自身、ドイツのナチズムに対する批判的評論を書いてもいることから、当時のファシズムの政治体制に対して三木が批判的だったことは確かだろう。

ただし、タウンゼントが指摘するように、三木は「記念碑に刻まれているほど黒でも白でもない」ということは留意するべきではない¹²。日本でも、より思想的な面を扱う議論において、三木の哲学には本質的に他者が欠落しているという指摘もある。赤松常弘は三木の哲学を「遺稿『親鸞』などの宗教論以外では、間接的であれ、他者が問題になったことはない」と分析する¹³。三木の哲学はすべての人間が人間としての共通本質、「ヒューマンネイチャア」を持っていることを前提としているのである¹⁴。それぞれの個人や民族といった人間の相違よりも、人間の同質性に三木は注目していたと言えるだろう。こうした立場から、異質な他者を欠いたまま東亜共同

体論を論じたことが、「アジアの人々との協力をうたいながら、日本の共同体の拡大を求め、それに組み込めない人々を異質の人間として排除するか支配するための理論として機能した」要因となったと赤松は指摘する¹⁵。

哲学者としての三木清

前節のように、20世紀末までの海外における研究では、三木は京都学派のカテゴリーの下、軍国主義日本における政治的立場とともに論じられることが主だったと言える。しかし、哲学者としての三木の思想に関心が寄せられてこなかったわけではない。

1998年、京都学派の思想家の略歴や、著作の抜粋の翻訳をまとめた書籍である『近代日本哲学のためのソースブック (Sourcebook for modern Japanese philosophy)』が刊行された。その中で三木は、「人間の分析」と「伝統論」の二編が翻訳、掲載されている。

「人間の分析」は『パスカルにおける人間の研究』の第一章が翻訳されたものである。三木の執筆活動初期、マルクス主義の影響を受ける前に論じられた、独創的な人格主義 (personalism) とヒューマンイズムに対する洞察を提示することを目的に同論文は選ばれている¹⁶。一方、同名の評論の全訳である「伝統論」は、歴史哲学を、社会の中の人間と文化との関係性として捉える三木の議論から、三木におけるマルクス主義と西田哲学の影響を見ることを目的として選ばれている¹⁷。ここでは三木の思想の特徴として、「三木が、弁証法的唯物論の理論を伴わない、人間の行為、あるいはプラクシスのマルクス主義的理解を強調していること」が注目されている¹⁸。

また、2011年、『日本と大陸の哲学 (Japanese and continental philosophy)』では藤田正勝の「ロゴスとパトス——三木清の構想力の論理」が取り上げられ、三木の構想力論が紹介されている。同書は、それまで主に仏教との関わりといった宗教的問題や、前節で見たような政治的思想が主に注目されてきた京都学派の思想を、哲学的見地から考察することを目的とした論集である。

藤田は、同論文で、三木の『構想力の論理』の重要性を主張する。それまで三木の思想の中で重要な要素でありながらも未解決のまま

にされていた「ロゴスとパトスの統一」の問題の解決を試みた著作であるからだと理由を説明する¹⁹。藤田は、構想力の論理はプラクシスの論理であり、三木独自のアントロポロジーの理解と密接に関わっていると指摘する。三木はアントロポロジーを、人間存在の全体を扱う学問であると考え、身体から抽象されない人間存在を考察の対象とした。これによって、物体として客観的分析の対象とされてきた身体を、人間の主体性、主観性と密接に関わる「心に生かされた身体」として捉え直そうとしたのである²⁰。

上記のような特定の思想の紹介とは異なった視点から、三木の思想を紹介している著作として、タウンゼント著『三木清1897-1945——日本の遍歴する哲学者 (Miki Kiyoshi 1897-1945: Japan's itinerant philosopher)』(2009年)は特筆に値するだろう。表題の「遍歴」は、三木のキーワードとして論じられる言葉である。三木は自身の人生を振り返る際、「遍歴」という言葉を使う²¹。この語には、三木の「宗教的、政治的ドグマに対する、意識的、あるいは無意識的な深い不信と、彼の思想や信条の変動性の保護」という二つの側面が含まれているとタウンゼントは主張する²²。特に後者の変動性の保護は、後の三木の活動を勇気あるものと見るか、「転向」と見なすかといった、三木の政治的立場と評価の議論が起こることにも繋がっているとする²³。

こうした三木の「遍歴」を整理するために、同書は三木の思想を伝記的に整理している。全体の構成としては、序章を三木のこれまでの評価の整理や心理学的分析に、前半を三木の出生から留学期間までの、人格や思想形成の土台の時系列的整理に、後半を帰国から獄死するまでの哲学者としてのキャリアや周辺との影響関係の整理にそれぞれ充てている。その中で、タウンゼントは三木の哲学的関心の遍歴を、歴史哲学からヒューマニズムを経て、マルクス主義とハイデガーの存在論の研究の中で、独自のアントロポロジーの展開へと移っていくと整理する。

タウンゼントは伝記的な書き方をしているため、三木の著作を主として扱っているわけではない。しかし、三木の人生を縦軸として彼の思想を網羅的に体系づけることによって、西田やマルクス、ハイデガーなどの思想家、あるいは戦争へと転じていく日本の社会的状況といった、三木に対する外的要因の影響をより詳細に知ること

ができる。特に三木によるゲーテの研究は見過ごされがちだが重要だという指摘は注目すべきだろう。三木はゲーテ研究を通して歴史哲学の領域からヒューマニズムへと自身の思想を展開させることとなったとタウンゼントは指摘する²⁴。

タウンゼントの議論で興味深いのは、本書の序章で、三木の哲学をパーソナリティ心理学の観点から分析する点だろう。三木のアイデンティティは詩人的性質と哲学的性質に分けられるとして、この二つの性質を統合しようとするもがきが三木の哲学やジャーナリズムであると分析する。そして、三木の著作には、この二つの性質の統合に失敗しているものが多くあると指摘する²⁵。

本節で見てきたように、欧米では、三木の思想の中でも人間への考察、ヒューマニズムやアントロポロジーの議論が特に注目されてきたと言えるだろう。しかし、やはり三木の思想の紹介や解説、分析にとどまっており、特定の哲学的議論や思索の中でその思想を活用されているような状況とは言い難い。

克蘭メルの構想力論

2010年代に入り、三木の哲学をよりアクチュアルなものとして扱う議論が現われてきた。本稿で特に注目したいのが、克蘭メルによる三木の構想力を用いた議論である。

克蘭メルは、三木の構想力論をおそらく最も詳細に議論し、評価している海外の論者だろう。克蘭メルは、三木に関する研究だけでなく、西田幾多郎を中心に、京都学派の思想と西洋の存在論、認識論との関係や、空海の仏教など日本の宗教思想に対する研究などを多数発表している研究者である。

克蘭メルは、三木の構想力論を、現代ヨーロッパで盛んに議論されている社会的構想力の概念の先駆として捉える。そして、三木の『構想力の論理』が持つ意義を、「人間の歴史を、構想力を通して形を生み出す技術的生産の歴史として把握する哲学のための基礎」を残したことであると評価する²⁶。また、「三木の形—無形のダイナミズムの展開は、近年のヨーロッパ大陸における構想力の比較読解との興味深い道に開けている」とも指摘しており²⁷、欧米における

構想力再考の時流に対して、三木の構想力論が有意義であることも示している。上述の藤田の論文やタウンゼントが、三木のアントロポロジーの議論に注目し、その文脈において、構想力の主観・客観の統一作用を論じているのに対し、克蘭メルはより現代的で実践的な領域で三木の構想力の議論を応用しようと試みていると言えるだろう。嘉指信雄は克蘭メルの議論を「三木の構想力論を現代思想の地平において捉え直そうとする試み」として紹介している²⁸。

それでは、より具体的な内容を見ていこう。克蘭メルは、三木の構想力論を、ハイデガーによるカントの構想力解釈に影響を受け、それをより具体的な社会のタームにおいて展開したものとして、西洋思想の伝統の中に位置づける²⁹。カントが純粋理性批判と判断力批判で検討した構想力の役割は、感性和悟性の統合と、美術的制作を行うための機能であった。これを受け、ハイデガーは、特に感性和悟性の統合の能力に注目し、世界一内一存在が成立するための世界一像（world-Bild）を作り出す機能として構想力を解釈した。三木はこのハイデガーによるカント解釈を超えて、構想力の意義を、意識におけるイメージの現前だけでなく、実践的、歴史的次元における具体的な形の現前として規定した。これにより、制度や技術、そして文化社会としての人間世界を形成する能力を、構想力に付与することが可能となったと克蘭メルは評する³⁰。

こうした整理を元に、克蘭メルは、現代社会において構想力が持つ意義を明らかにするために、コモン・センスと構想力との関係性を指摘する。その際、中村雄二郎の共通感覚と常識という二つの観念を用いてコモン・センスの概念を整理する。共通感覚はアリストテレスに起源を持つコモン・センスの理解で、人間が外界から受け取った感覚を統合し、発展させる、人間が持つ機能である。常識はローマ古典に起源を持つコモン・センスの理解であり、特定の社会や文化圏内の人びとが共有していることが自明である判断能力のことを指す³¹。克蘭メル自身が明確に問題提起しているわけではないが、彼の主な問題意識は、現代社会における、人間の感覚の変化と、それによる共通感覚としてのコモン・センスの機能不全であると考えられる。それは、常識によって、共通感覚の機能が抑圧されているとする中村の問題意識の引用や³²、現代IT技術によってもたらされたメディアから受ける感覚の変化に対し、マーシャル・

マクルーハン (M. McLuhan) のタームを用い「新たな感覚比率 (new sense ratio)」の発見が必要であると指摘していることなどから読み取れる³³。こうした問題を、構想力の社会的機能や創造性とコモン・センスとの関係を考察することによって整理、解決しようとする。

その中でクランメルは、中村がコモン・センスと構想力を結び付けたことを評価する一方、中村によるコモン・センスと構想力の関係性の説明は不十分であるとも指摘する。

中村は、構想力が持つ形成的能力を、社会慣習的な常識を作り出し得るものであるとする。その一方で、共通感覚が自己反省や変化の能力によって、常識に対する批判的機能の役割を果たすとしている³⁴。そして、その役割を果たす有効な方法が、イメージと言語が結びついた「知的レトリック形式」を用いた議論であるとする。レトリックは、「特定の聴衆や読者を想定し彼らの常識に訴えて相手を説得するという、具体的実践にかかわるもの」である³⁵。このようなレトリックにより常識を動揺させ、相対化する。それによってコモン・センスに倫理的、政治的意義の回復を図るのが中村のコモン・センス論である。

こうした中村の議論に対して、クランメルはあくまで構想力の創造性、制作性に注目する立場から反論する。「私が思うに、この回復において、我々は、世界—地平 (world-horizon) と我々の共—世界—内—存在 (co-being-the-world) の形成における構想力の制作的機能を忘れることはできない³⁶」。「したがって、我々はここで、社会的構想力と社会的構想のタームから、より明確に構想力の社会的意義を展開している思想家を振り返る」として、ポール・リクール (P. Ricoeur) やコルネリウス・カストリアディス (C. Castoriadis) の論じた社会的構想力の議論を整理、確認していくこととなる³⁷。これに続く両者の社会的構想力論は、社会が持つ常識や枠組み、意味の体系とは絶対的なものではなく、常に構想力によって相対化され、更新され続ける曖昧なものであると同時に、その社会の中の人間存在もまた、そうして作られた意味の中で馴化、規定されていくとする相互関係的なものとなっている。

中村は、構想力の形成作用によって常識が作り上げられるとして共通感覚と対置し、共通感覚が持つ批判的機能によって常識を動揺

させることの重要性を主張した。これに対し、クランメルは共通感覚と構想力を結び付け、社会的規範としての常識を（再）形成するという、形成作用に注目している。社会が自明なものとして持つ枠組みを作るだけでなく、それを崩し、再形成する能力を持ち、それによって変化した社会的文化的環境への適応のために自己を絶えず変化させる。このような社会的構想力の機能こそ、クランメルが現代社会において再考するべきだと評価するものである。

以上のように、クランメルの議論は、三木の構想力を、現代ヨーロッパの社会的構想力と関連した現代哲学の地平の中で理解するために有益である。しかし、クランメルの議論にはやや不足している視点もあるように思われる。まず指摘したいのは、クランメルの議論には、三木の「技術」の概念が欠けているように見える点である。そのため、人間世界における、常識と共通感覚の、社会的構想力を通じた相互影響関係が抽象的なものとなってしまっている。その相互影響関係の中での人間の行為や活動はいったいどういうものなのか。三木であればそれはプラクシスを含んだポイエーシス、すなわち制作的行為であり、ポイエーシスを通じた環境への作業的適応であると言えるだろう。クランメル自身が、どのようにそういった人間の行為や活動を定義づけるかは、今後のクランメルの研究活動によって明らかにされるかもしれないが、現在では明示されていない。

また、クランメルの議論が三木の第二の自然の領域内にとどまっていることも指摘することができるだろう。クランメルは、自然にまで拡張される三木の構想力の論理を「多くの論者が多分に問題を含むと論じている」と紹介していることから³⁸、構想力を人間の世界の外にまで拡張する三木の論理には、あまり肯定的ではない印象を受ける。

確かに、三木が構想力を自然の領域へと拡張することに対して批判的な意見があることは事実である。しかし、三木の構想力論が持つ、自然と人間の二項対立を形の論理によって解消するという議論は、西洋思想の伝統に対するアンチテーゼとして大きな意味を持つ物であると思われる。今井弘道はハンナ・アーレント(H. Arendt)と三木の、自然と人間の関係性を比較する文脈において、アーレントの自然が人間にとって「荘厳な無関心」に包まれた闇であるのに対

し、三木の自然はその対立を越え、「人間の行為と容易に融合しうるもの」であったと指摘する³⁹。また、吉田によれば、三木において構想力に基づく人間の行為は、「人間と自然の技術による媒介を人間と自然の合一としての具体的「形」の制作として捉え」られている⁴⁰。こうした視点によって、三木は人間の行為だけでなく自然のはたらきをも、転形の論理においてポイエーシスとして捉えることになる。この視点は、今井がアーレントとの比較で示している通り、三木と欧米の思想家との明確な相違である。克蘭メルは現代思想の枠組みや、欧米の構想力論の流れの中に三木を位置づける一方で、三木が持っていた独自性のある程度そぎ落としてしまっているように見える。

また、歴史の解釈についても同様に、三木は転形の論理において自然をもその歴史概念に包括する射程の広さを見せるのに対して、克蘭メルは基本的に人間世界の歴史にのみ注目している。それはリクールやカストリアディスの社会的構想力が、特定の間人コミュニティの範囲内で適用される意味の体系を形成/再形成するものであるとしていること、そして、三木の構想力ではなく、この両者の社会的構想力を、より自身の関心に近いものとして引用してくることからも明らかであろう。

克蘭メルの構想力とコモン・センスの議論は、三木や中村がおこなってきた議論を、現代ヨーロッパ思想の枠組みの中に明確に位置付けて扱っている。それだけでなく、現代ヨーロッパの議論を補完し、また、現代ヨーロッパの議論によって補完されるような、相補関係の成り立つものとして整理していると言えるだろう。その一方で、特に三木が持っていた、自然と人間、客観と主観、身体と精神との合一といった特徴については十分に論じられているとは言い難い。先に嘉指の指摘を引いたように、克蘭メルは現代思想の地平に三木の思想を捉え直し、その試み自体は成功していると思われる。しかし、その上で、三木の思想の重要な側面を論じ残していることは否めないと言えるのではないか。

おわりに

本稿では、三木清が海外の論者からどのように論じられているかを概観した。20世紀の終わりまで、三木は戦時日本の思想を牽引した京都学派の一角として、その政治的な立場を抜きに語られることは難しかった。しかし、パークスによる批判や、ハシント・サバラによる三木の論文の紹介が1990年代末に行われ、21世紀に入っようやく三木の哲学的営為が注目されることとなった。特に注目されたのは、三木独自のアントロポロジーの解釈であった。こうした中、三木の哲学を紹介するだけでなく、より実践的な思想として位置付け、自身の議論に参照した論者としてクランメルを紹介し、そのコモン・センスと社会的構想力論を確認した。

しかし、クランメルの議論は、人間世界の枠内での構想力の意義の議論に注力しているため、三木の構想力が持つ、作業的適応による自然と人間、客観と主観との統一という要素に対して十分な議論がなされていなかった。そのため、三木が持つ、西洋思想における自然対人間の構図に対する反省的な視座が失われてしまっているように思われる。三木に限らず、京都学派が欧米の哲学を吸収するだけでなく、日本、あるいは東洋の哲学を作ろうとしていたことを考えれば、自然と人間、客観と主観の合一という問題は避けて通れないテーマなのではないか。もちろん、三木の哲学、特に構想力に関する思想が、不完全であることも否めない。それは、三木がその生涯を突然に絶たれ『構想力の論理』が未完である点や、研究ノートとして書かれたため、体系的な論述に徹していないということからも事実だろう。しかし、三木が扱った自然と人間の関係性の見直しは、見過ごしてしまうにはいささか大きすぎる問題であると思われる。今後、三木の構想力が自然をも包括することの持つ意義についての検討も必要であるだろう。

〔注〕

- 1 Jacinto Zavala, 1998, p.292
- 2 Townsend, 2009, p.5
- 3 同書, p.5

- 4 同書, p.12
- 5 Townsend, 2009, pp.6-7
- 6 Parkes, 2011, p.248
- 7 同書, p.249
- 8 Krummel, 2016, pp.13-14
- 9 内田、2019年、180頁
- 10 鈴木、2019年、199頁
- 11 吉田、2019年、207頁
- 12 Townsend, 2009, p.5
- 13 赤松、1994年、332頁
- 14 同書、333頁
- 15 同書、337頁
- 16 Jacinto Zavala, 1998, p.294
- 17 同書, p.295
- 18 同書, p.296
- 19 Fujita, 2011, p.306
- 20 同書, pp.308-309
- 21 Townsend, 2009, p.9-10
- 22 Townsend, 2009, p.10
- 23 同書, p.10
- 24 同書, p.157
- 25 同書, p.8
- 26 Krummel, 2016, p.22
- 27 同書, p.22
- 28 嘉指、2019年、144頁
- 29 Krummel, 2019, p.53
- 30 同書, p.53
- 31 Krummel, 2017, p.266
- 32 Krummel, 2019, p.67
- 33 Krummel, 2017, p.271
- 34 Krummel, 2019, p.61
- 35 中村、2000年、307頁
- 36 Krummel, 2019, p.61
- 37 同書, p.61
- 38 Krummel, 2016, p.21
- 39 今井、2005年、105-106頁
- 40 吉田、2011年、126頁

[参考文献]

- Fujita Masakatsu, "Logos and Pathos: Miki Kiyoshi's Logic of the Imagination," Bret W. Davis, Brian Schroeder, and Jason M. Wirth eds., *Japanese and continental philosophy: conversations with the Kyoto School*, Bloomington: Indiana University Press. 2011: pp.305-318.
- Jacinto Zavala, Agustín, "Chapter Five Miki Kiyoshi", David A. Dilworth and Valdo H. Viglielmo, with Agustín Jacinto Zavala eds., *Sourcebook for modern Japanese philosophy: selected documents*, Westport: Greenwood press, 1998: pp.289-320
- Krummel, John W.M., "Introduction to Miki Kiyoshi and his Logic of the

- Imagination”, *Social Imaginaries*, Volume 2, Issue 1, Spring 2016: pp.13-24.
- , “Creative Imagination, Sensus Communis, and the Social Imaginary: Miki Kiyoshi and Nakamura Yujiro in Dialogue with Contemporary Western Philosophy,” Michiko Yusa ed., *The Bloomsbury Research Handbook of Contemporary Japanese Philosophy*, London: Bloomsbury Academic, 2017: pp.255-284.
- , “Rethinking the History of the Productive Imagination,” Suzi Adams and Jeremy C. A. Smith eds., *Social imaginaries: critical intervention*, London: Rowman & Littlefield International, 2019: pp.45-74.
- Parkes, Graham, “Heidegger and Japanese Fascism: An Unsubstantiated Connection,” Bret W. Davis, Brian Schroeder, and Jason M. Wirth eds., *Japanese and continental philosophy: conversations with the Kyoto School*, Bloomington: Indiana University Press, 2011: pp.247-265.
- Townsend, Susan C., Miki Kiyoshi 1897-1945: *Japan's itinerant philosopher*, Leiden: Brill, 2009.
- 赤松常弘『三木清——哲学的思索の軌跡』ミネルヴァ書房、1994年
- 今井弘道「三木清『構想力の論理』の現代的意味——ハイデッガー・アーレント・田辺元・丸山真男と関連して」『情況』第三期第六巻第三号、2005年、88-111頁
- 内田弘「戦時日本における三木清の技術哲学」田中久文・藤田正勝・室井三千博編『再考三木清——現代への問いとして』昭和堂、2019年、178-189頁
- 嘉指信雄「ヒューマニズムとホモ・デウスの行方——パトス・技術・フィクション」田中久文・藤田正勝・室井三千博編『再考三木清——現代への問いとして』昭和堂、2019年、130-144頁
- 鈴木正「三木清の協力的抵抗の本心——「東亜共同体」論をめぐる」田中久文・藤田正勝・室井三千博編『再考三木清——現代への問いとして』昭和堂、2019年、190-205頁
- 中村雄二郎『共通感覚論』岩波書店、2000年
- 吉田傑俊『「京都学派」の哲学——西田・三木・戸坂を中心に』大月書店、2011年
- 「三木清の反ファシズム論」田中久文・藤田正勝・室井三千博編『再考三木清——現代への問いとして』昭和堂、2019年、206-220頁